

学位論文審査の要旨

学位申請者	相川 頌子 ジェンダー学際研究専攻 2017年度生		論文題目	男性性と有配偶者の家事・育児遂行—ケアする男性性に着目して—
審査委員	主 査:	石井ケンツ昌子 教授	インターネット公表	学位論文の全文公表の可否 : 否
	副 査:	西村 純子 准教授		「否」の場合の理由
	副 査:	杉野 勇 教授		<input type="checkbox"/> ア. 当該論文に立体形状による表現を含む
	審査委員:	マルセロ・デアウカンタ 准教授		<input type="checkbox"/> イ. 著作権や個人情報に係る制約がある
	審査委員:	申 琪榮 准教授		<input checked="" type="checkbox"/> ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている
学位名称	博士 (社会科学) (Ph. D. in Sociology)			<input checked="" type="checkbox"/> エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている
				<input type="checkbox"/> オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている
				※本学学位規則に基づく学位論文全文のインターネット公表について

学位論文審査・内容の要旨

日本では、2000年代以降、男性の家事・育児は社会的に大きな注目を集めてきたが、実際の男性の家事・育児関連時間は依然として少ないのが現状である。このような背景を基に、本研究では2010年代に特に欧州で関心が集まった「ケアする男性性」(caring masculinities)の概念を援用して、①日本の男性はこの男性性をどの程度受容しているのか、②ケアする男性性とサラリーマン的男性性との関連、③ケアする男性性が家事や育児遂行にどのような影響を与えているのかを解明することが主な目的である。アイデンティティ理論と男性性の複数性を考慮した分析枠組みから主に3つの仮説を導き出し、笹川平和財団が収集し、筆者も関わった『男性の役割についての調査』データを使用して検証した。本データは2018年3月にWEB調査により収集され、対象者は東京、東北、北陸、九州、沖縄に在住する20～69歳の男性5000名である。主な分析手法は重回帰分析と共分散構造分析である。

記述統計からは、20～40代の男性はサラリーマン的男性性よりもケアする男性性を志向しているが、年齢層が高くなるほどサラリーマン的男性性を支持する傾向があること、社会経済的地位が高いほど、サラリーマン的及びケアする男性性の両方が高くなることなどが明らかになった。重回帰分析からは、年齢や居住地を統制した場合でも、サラリーマン的男性性とケアする男性性に正の関係が見られた。共分散構造分析からは、子どものいない有配偶者の男性ではサラリーマン的男性性に肯定的であるほど家事頻度が少ないこと、末子が6歳以下の父親の場合は、ケアする男性性に肯定的な場合は家事と子どもとの交流頻度が高いことがわかった。

本審査委員会は2019年12月18日と2020年2月6日の2回開催された。これらの審査委員会においては、貴重なデータを分析して興味深い課題に取り組んだことは評価されたが、博士論文としては全体的に量不足であること、ケアする男性性とヘゲモニックな男性性についての関係を含む説明が十分ではないこと、男らしさの揺らぎに関する指摘はあるが、ケアする男性性がどのように形成されたのかに関する説明が必要であること、当初提示されていたdoing genderの視点が本論文の分析では生かされていないことなどが指摘され、大幅な再分析と修正・加筆が求められた。これらを含む審査委員の指摘や提案に丁寧に対応して修正を行った結果、再提出された論文はかなりの改善が見られた。

審査委員会は、これまで理論的な議論は蓄積されてきたが実証研究は少なかったケアする男性性と他変数との因果関係を量的データにより検証できたこと、男性性と育児・家事との関連を明らかにしたことなどを本研究の意義であると認めた。公開発表会は2020年3月3日に開催され、発表はよく整理され、多くの質問に対して申請者は適切に応答した。最終審査会では、本論文が本学大学院人間文化創成科学研究科の博士の学位水準に達していることを認め、合格とし、博士(社会科学)Ph.D. in Sociologyの学位を授与することを審査委員全員一致で決定した。